東アフリカ高地におけるアグロフォレストリーの発展手法の開発

Methods for developing the agroforestry in East African Highland

佐藤　靖明（SATO Yasuaki）

一つの畑の中に樹木と樹木以外の農作物を混植する「アグロフォレストリー」という栽培システムは、作物生産性向上、生態系保全、砂漠化防止など多くの効果が見込まれている。しかし、このシステムが社会の中で維持・発展させるための方法論はまだ確立されていない。

本研究課題では、東アフリカ高地におけるバナナ栽培を基盤としたアグロフォレストリーの発展にかんして、住民の植樹活動を活発化させるための方法を考えることを目的とした。ウガンダでの現地調査によって、(1)～(3)の知見が得られた。

(1)アグロフォレストリーの特徴

ウガンダ中央部のアグロフォレストリーは、住居を取り囲むホームガーデンの形式をとる。25 世帯を対象に一定の区域内にある構成樹種を調べた結果、40 以上の樹種と利用法、また、主作物であるバナナの品種多様性が明らかになった。また、住民は、他の植物との相性や機能、景観上の理由から、植えると良い／悪い樹種を認識しており、住民の知識の深さがうかがえた。

(2)苗木の配布と栽培試験の有効性

本課題を開始する以前に調査村で行った苗木の配布と栽培試験について、配布後の感想を住民に聞いた。その結果、植物種を選択する際の主体性に対する細やかな配慮が必要であるものの、この手法は住民の栽植への関心と知識を喚起させ、農村への波及効果が高いことが分かった。また、苗木の配布は金品の授受とは異なり、彼らの間で不平等感を生み出す問題が少なく、住民間や住民―研究者の間で、それまで顕在化することがなかった知識や意見をスムーズに交換できる環境がつくられることが分かった。なお、特定の食用果樹がとくに好まれることも分かった。

(3)住民組織の活用可能性

ウガンダ中央部の農村では、小規模な互助組織の結成が近年多くみられる。それらの組織の目的で最も多いのが、メンバーの親族の死去時における金銭・食料・労働力の提供である。この背景には、慣習的な相互扶助のしくみが失われつつある中で、生活の各方面において世帯間で協力しあう新たなしくみの必要性が増してきたことが考えられる。このことを踏まえて、数世帯～10 世帯位の住民組織が植樹活動を運営することが、この地域に根差して植樹活動をすすめる上で有効であることが考察された。

(4)食育への応用の必要性

中央部と西部の農村において、幼稚園・小学校の教師に、子どもの食と栄養に関する

聞き取りをおこなった。その結果、栄養に関する教育が理科の一環としておこなわれるものの、全体のカリキュラムの中ではあまり時間が割かれていないことが分かった。食への嗜好と植林は結びつきやすいが、それに関して、子どもへの食の教育という観点も、植林という長期的なタイムスパンを考えたときに重要であることが示唆された。